

# オンライン授業で行う協働的アウトプット活動

## —Zoom を用いたディクトグロスの実践—

大場 貴志

### 1. はじめに

コロナ禍が続いた今年度、大学の授業もオンラインでの実施が余儀なくされた。本学では Zoom を用いた双方向での授業を中心に、適宜オンデマンド型と組み合わせながらの授業を実施した。オンライン授業開始当初は、Zoom にも不慣れだったため、教師の説明中心の講義形式だけでなく、学生がアクティブに参加できる授業形式も取り入れるよう試行錯誤の日々が続いた。本稿で紹介するのは、近年、英語のアウトプット活動として普及してきている「ディクトグロス(dictogloss)」という協働型の文章復元活動をオンライン形式で行った実践例である。このような参加型のアウトプット活動は、対面でないことと実施することが難しいのではないかと筆者も考えていたのだが、オンラインの形態の利点を活かし、対面ではできなかったことも可能になった。今後、オンライン授業は対面形式の授業が再開されてからも、併用されていく可能性が高い。オンラインでもその特性を活かせば、効果的な双方向の学びが可能になる例として参考にしていただければ幸いである。まず初めに、第二言語習得論(Second Language Acquisition)に基づくアウトプット活動の効果を概観し、その例としてディクトグロスの手順と効果を説明する。次に、ディクトグロスをオンライン(Zoom)で実践した例を紹介し、指導上の留意点や活動を発展させる方法についても提案したい。

### 2. アウトプットの効果とディクトグロス

第二言語習得論研究によれば、アウトプットをすることで、学習者は、自分が伝えたいことと実際に言えることにはギャップがあることに気づき、実際に発話することで、自分の発話が伝わるかどうかの仮説を検証し、フィードバックをもらって修正したりすることの機会を得る。また、発話する過程で、意味だけでなく統語的な処理も行い、言語形式にも

注意を払う。さらに、継続的にアウトプットすることで言語知識の自動化(automatization)が促進されるとも言われている(Kowal & Swain, 1994; 村野井, 2006)。これらのアウトプットが果たす機能はインプットを処理する際にはないものであり、理解可能なインプット(comprehensible input)だけでなく、アウトプット活動も言語指導に取り入れていく必要性を示唆している。

アウトプット活動の中でも、協働的な活動の一つとして、ディクトグロス(dictogloss)というものがある。この活動は、Wajnryb が“Grammar Dictation”と称して考案した、短めの文章を共同で復元(再構築)するアウトプット活動であり、リスニング、ライティング、文法などの技能向上に役立つと言われている(Kowal & Swain, 1994)。村野井(2006, p.76)はその手順を以下のように説明している。

- (1) まとまった文章を聞く。文章は未習または既習のもの。
- (2) 学習者はメモを取りながら聞く。
- (3) ペアまたはグループで、お互いのメモを持ち寄り、元のテキストをなるべく正確に復元する。この際の話し合いは、目標言語または母語で行う。
- (4) 復元したテキストと元のテキストをつき合わせ、確認、修正を行う。
- (5) 必要に応じ、教師は文法項目に関する明示的説明を加える。

この活動は、村野井(2006)によれば、初見のページをリスニング重視型で扱うことも可能であり、テキストを読んだ後の読後活動としても行うことが可能である。この活動を通して、まず集中してリスニングを行い、要旨を理解し、キーワードをメモする必要があることから、リスニング力の向上が期待

できる。また、協働でまとまった長さの英文を書く必要がある、そのためには文法的な適切さや正確さをグループ内でモニターするため、文法の運用やライティングの技能向上にも効果的であると言える。

### 3. オンライン版ディクトグロスの実践

筆者は以上のような手順でディクトグロスを用いた指導を以前中学生に行ったことがあった。その際、教科書の本文の読後活動として行い、英文を5～6回読み上げたからか、ディクテーションに近い活動になってしまった。そのクラスの学習者には英語が得意ではない生徒もいたため、この活動に慣れていないと2回程度読んだだけでは不十分だと考えたからだ。しかし、この活動の目的はディクテーションのように一字一句を書き取らせることではないため、読み上げる回数は少なめに(2回ほど)設定することが望ましいと考える。それを踏まえ、今回、大学の授業で行った際は、英文を2回のみ読みあげた。英文は、大学入試用のテキスト(里中, 2001, p.89)から64 wordsの文章を用いた。手順は以下に示すように行った。

- (1) 英文に使用されている単語を5～6個提示し、英文のトピック(Sleep)のみ伝え、2回読み上げる間にメモを取るように伝える。後ほど聞いた文章を復元する必要があることも伝える。
- (2) 2回読み上げ、学生はメモを取る。(全ての語句を書き取るのではなく、内容を把握しキーワードをメモするよう指示)
- (3) Zoomの「ブレイクアウト」に3～4人からなるグループを振り分け、お互いのメモを見ながら英文を構築させる(本文の内容が伝われば、構文や語句は変えていいと伝える)。15～20分程度与える。
- (4) 各グループの代表者にグループで完成させた英文を「チャット」コーナーに書かせる(あらかじめ書いて準備させていたものを貼り付けさせる)。
- (5) 全てのグループの復元した英文を全員で共有して、教師が各復元文章にコメントをする。文法や構文のエラーがあったらその場で明示的に訂正する。

- (6) 最後に、原文を共有機能で提示して読ませる(原文と表現方法が同じではなくてもいいと再度確認する)。

以上のようにオリジナルの手順に若干変更を加えて実施した。読み上げた文章は64 wordsと非常に短いものだったが、2回しか聞く機会がないため、この程度の長さの文章でも学生は難しく感じたようだ。また、学生の振り返りシートを見ると、「ディクテーションとは違い、聞き取れない分があっても自分たちで協力して読み上げた内容と同じものを英文で作り上げる」というこの活動の趣旨は伝わっていたようだった。協働で行うことの利点として、自分が聞き逃したり、理解があやふやな箇所があったりしても、協力して復元できるという意見があった。対面ではなくても、Zoomのブレイクアウト機能を通してこれは十分に行えていたようだ。

また、Google Documentの共有機能を使用して協働でライティングを行っていたグループもあった。復元後にチャットに英文を添付するというタスクがあったため、手書きの代わりに、WordやGoogle Documentを有効に活用できる点もオンラインで行うことの利点である。対面授業では、復元した英文を全体で共有することが難しい。全グループに黒板に書いてもらうと時間も要するし、スペースも不足する。Zoomではチャット機能を黒板の代わりに有効に活用することができた。

復元された英文の共有とフィードバックの方法としては、オリジナルの手順の(4)を行う前に、全体でチャット画面を通して英文を共有し、教師が全てのグループの英文を読み上げ、意味が通じるかを確認し、うまくパラフレーズしてまとめている表現には特にポジティブなフィードバックを与えた。また、構文等でエラーがあった場合、修正したものを明示的に伝えた(受講生が多く時間的な制約で明示的なものにした)。このフィードバックをクラス間で共有することは、対面授業で黒板を活用するとなかなか難しかったので、この授業ではオンラインの利点を十分活かすことができたと思われる。ある学生が「ブレイクアウトルームから戻って他のチームの考えを見ると自分なりの言葉でとても上手に文章をまとめていて尊敬しました。こういった場面では間違えることを考えるのではなく、頭を柔らかくして取

り組む必要があることが分かりました。」と振り返っていたが、他のグループの復元英文を共有し、フィードバックも聞くことができると、自分たちのグループへのフィードバック以外にもさらなる学びが得られると思われる。ディクトグロスとは、英文を復元させた後に、原文と比較させ、各自修正させて、プリントを回収して終わり、という流れもあるだろうが、時間の許す限り(または次の時間に)全体で共有する機会を是非とも作りたいものだ。

さらに、学生からは、この活動を自身の自主学習でも活用したいという声があった。現在では、BBC, CNN, News アプリなど、無料で音源やスクリプトが入手可能な教材が多くなった。教室外での英語学習でも、ディクトグロスの手法を取り入れ、英文を聞くだけでなく、聞き取った内容をパラフレーズしてみる(要約してみる)という学習をすることも効果的だろう。中学校や高等学校では、自主学習(家庭学習)として取り組ませ、ノートに復元したものを書いてもらい、提出したものを添削して返却する、というような双方向の学習も効果的だろう。

#### 4. 最後に

本稿では、協働的なアウトプット活動であるディクトグロスをオンライン(Zoom)で効果的に実施する手法と指導上留意する点を紹介した。アウトプット活動はオンラインでは対面の授業のようにうまくいかないのではないか、という懸念も当初は確かにあった。しかし、Zoom 機能の活用の仕方次第では、対面授業時以上に効果をあげることも可能であるということが分かった。特に、復元した英文の共有とそれらへのフィードバックの機会の確保が Zoom を用いると効率的にできる。これは対面で行う際も、Mentimeter などのソフトウェアを用いたりして、各グループの復元英文をスクリーン上で共有することで可能になると思われる。また、教師の指示の出し方や手順で、その活動への学習者のフォーカスの仕方が変わるということも分かった。この活動が、ディクテーションではないということを伝え、自分たちでオリジナルの英語表現を作り、協力して復元するという意図を伝えて行えば、リスニング、ライティング、文法の練習に非常に効果的な活動になりうると思われる。コロナ禍でのオンライン授業は、

皆さんも非常に苦慮されてきたと思うが、筆者も試行錯誤の連続であった。しかし、オンライン授業の実践を蓄積していきながら、協働的なアウトプット活動をより効果的に行うための示唆を得られたと実感している。オンライン授業でできることを有効に活用し、学習者にとっても最大限の学びが得られるようなアウトプット活動の場を提供できるようにしていきたいものである。

#### 参考文献

- 里中哲彦(2001). 『大学が出したがる入試英文』河合出版.
- 村野井仁(2006). 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店.
- Kowal, M. & Swain, M. (1994). Using collaborative language production tasks to promote students' language awareness. *Language Awareness, 3*:2, 73-93.

(昭和女子大学国際学部 専任講師)